

## 第 10 号

2006年10月31日発行

藤沢市文書館

Fujisawa city archives

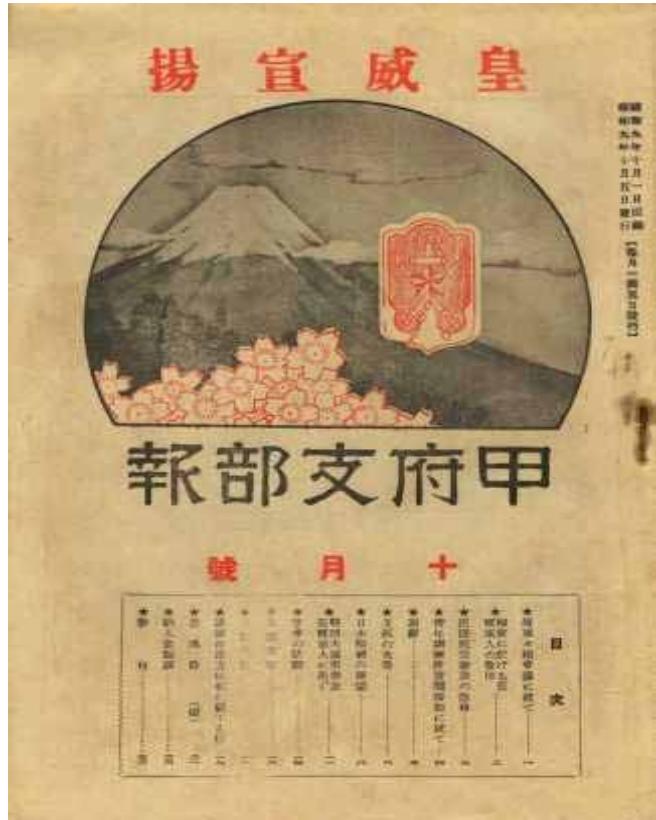
〒251-0054 藤沢市朝日町12-6

電話 0466(24)0171 FAX 0466(24)0172

### 【写真解説】

右の写真は、山梨県甲府にあった甲府連隊区司令部(戦前の表記では「聯隊」)内で編集され、発行されていた在郷軍人会甲府支部報の表紙を撮影したものです。表紙のデザインには、山梨県を象徴する富士山と、歩兵の襟章の色を象徴する桜があしらわれています。また、在郷軍人会の徽章を付することで、この冊子が在郷軍人会支部報であることがわかるようになっています。

支部報は毎月5日に発行され、定価は3銭(官製ハガキ2枚分)でした。総ページ数は30ページ前後で、内容は支部長の挨拶や時事問題への論説が主ですが、神奈川・山梨両県下の分会の活動報告や会員の投稿する俳句、戦死者の「忠魂録」なども掲載されており、近代日本の軍隊と社会との関係を、市町村レベルで考える上で重要な資料の一つといえます。



「帝国在郷軍人会甲府支部報」第155号  
(昭和9年10月発行)

### 【歩兵第49連隊について】

歩兵第49連隊は、日露戦争中の明治38(1905)年4月に編成され、その4年後に甲府に移駐しました。また、明治41年の徴兵区改正で、都築(つづき)・橘樹(たちばな)両郡を除く神奈川県域(大正14年神奈川全県に対象区域を拡大)の兵士の多くが、山梨県域出身の兵士とともに甲府で軍隊教育を受けることになり、藤沢市域出身の兵士たちの多くも甲府連隊の門をくぐったのです。

昭和11(1936)年に連隊は満州(現・中国東北部)に移駐し、昭和19(1944)年2月までソ満国境警備に従事しました。その間、連隊主力がソ連との国境紛争(カンチャーズ<乾岱子>事件 昭和12年<1937>6月24日)に参加したり、ノモンハン事件で速射砲中隊が出征したりしました。

昭和19年3月、第3大隊がグアム島に移駐し、連隊主力も11月にフィリピン・レイテ島に上陸します。しかし第3大隊は同年7月にグアム島で玉砕、連隊主力もレイテ島カンギポット山麓での激戦の中で戦死者を重ねました。翌年1月には連隊はセブ島に転進しますが、そこでも戦死者が絶えず、終戦時の連隊の生存者はわずか98名でした。(中村)

(参考文献: 樋貝義治『戦記甲府連隊』サンケイ新聞社、1978年など)

## 旅人が見た江戸時代の藤沢(2) 地震被害を目撃した旅人

徳川家康が関東に拠点を移して江戸城を築城して以来、現在までの間に三回、大きな地震が関東平野を襲ったといわれています。元禄十六年(1703)の元禄地震、安政二年(1855)の安政地震と、大正十二(1923)の関東地震です。

藤沢も、これらの地震では大きな被害を受けていますが、今回は、特に旅の途中で元禄地震に遭遇した人の旅日記を紹介したいと思います。

### 元禄十六年の地震

元禄十六年十一月二十二日夜半過(23日午前2時頃)に、関東地方を大きな地震が襲いました。相模湾奥の相模トラフを震源とし、マグニチュード8.2ともいわれる、元禄地震です。

この地震は江戸(現・東京)にも大きな被害を与え、和田倉門・日比谷門など、江戸城にも被害を出しました。また、地震の六日後の二十九日に小石川の水戸藩邸から出火して、本郷・湯島から下町にかけて大きな被害を出しました。

### 梨木祐之の地震体験

著者の梨木祐之は京都下鴨社の祠官でしたが、江戸から京都へ向かう途中、東海道戸塚宿での地震に遭い、その時の様子を「祐之地震道記」に書き残しています。祐之は地震発生時の様子を、

戸障子、小壁へた／＼と崩れかかる。各起あがるにかなわず、座敷を這もこよぶ。たま／＼立あがらんとすれば、足をもためず、横に倒る。光行、祐之、頬かゝりたる戸障子を踏やぶりて、庭え飛びくだる。

と、立っていられないほどの揺れだったと書いています。その後、うち続く余震と宿の南方から出火した火事の中、荷物をかかえて、

海道の北方へ走出んとしたりければ、はや左右の家頸倒して、道を塞ぐ。その崩れたる家の屋ねの上を、素足にてあゆむ

と、ほうほうの体で逃げ出しています。彼らは、麦畑の中へ逃れようやく一息つくことが出来たようですが、明け方の霜が雪のように降りる中で、「されども、寒冽の気、肌に徹れるをおほへたる者はなかりき」と、冬の寒さを感じる余裕も無かった模様です。

朝になると、ようやく余震も穏やかになり、火事も消し止められますが、宿にも問屋にも大きな被害が出ていたために旅人の世話をする余裕もなく、いろいろと奔走した結果、日暮れになってようやく上戸田村(現・横浜市戸塚区)の十兵衛という百姓の家に宿を得ています。

しかし、この先の旅への不安は募る一方であり、「藤沢の方も、道／＼の大木頸倒して通路なし。」「小田原は駅中焼亡せり。」などの情報がもたらされ、「かゝる上は、幾日逗留すべきやうもしつ」と不安な胸の内を日記に書き残しています。

### 藤沢宿の様子

この後、二十六日になって、ようやく一行は旅

を再開しました。この日の日記には、

藤沢の駅に至る道々、原宿杯(杯 = など)も、家あまた倒れて見えたり。

藤沢の駅に、さのみ人家頸倒の体も見えねども、悉傾損したり。下り方と、上り方との駅のはずれは、戸塚の人家と等しくみゆ。此駅にても、三拾人余圧れて死すとぞ。此内に飛脚の者壱人有りとぞ。駅を出はなれて、四谷に行。此所も人家半ば頸倒せり。

( 内は割注、()内は加藤、以下同)

と、地震直後の藤沢の様子が書かれています。藤沢宿でも四谷でも、多くの家が潰れたり傾いたりしてしまったようです。また、江戸では死者が少なかったと言われていますが、藤沢宿では三十人程の死者が出たとされていて、被害の大きかったことがわかります。

また、馬入川(相模川)の渡し場では、「廿二日の夜潮満ちて、舟共沖へ浪にとられたり」と、地震と津波の影響で渡し船が流されてしまい、旅人を渡す舟が減ってしまいました。

### その後の道中

祐之の一行は、大磯(26日)、湯本(27日)、沼津(28日)、江尻(29日)、金谷(12月1日)、浜松(2日)、赤坂(3日)と大急ぎで進み、十二月八日に賀茂(現:京都)へと帰り着いています。その間、浜松までの各所で地震の被害を書き留めています。祐之の日記によると、地震による建物や崖などの倒壊による被害だけでなく、その後の出火や津波の被害も大きかったことがわかります。

### 飛脚による情報の伝達

祐之は、江尻宿(現・静岡市清水区)で宿の人から、「前夜(29日夜)江戸大火事とみえて、夜中火の気夥敷みえたりとぞ」と、江戸の火事が遠く江尻でも見えたという話を聞きます。祐之は「実説さだかにしらず」と疑いの目を向けていますが、この火事は実際に起こっています。その二日後には、新居の渡し場の船頭からも、二十九日の暮れから翌朝にかけて、江戸の方に火気が見えた話を聞かされています。また、十二月四日に藤川宿(現:岡崎市)で祐之は、江戸の火事について、小石川から出火して本所にかけてが焼けたという詳細な話を耳にしています。東海道の各所では江戸の火事が話題になっていることがわかりますが、人々はどのようにしてこの情報を得たのでしょうか。

新居の船頭は、二日の夕方に通った飛脚から火事の話を聞いています。また、藤川宿に詳しい情報を伝えたのも江戸からきた飛脚でした。祐之も、地震の翌日には、鎌倉から江戸へ向かう飛脚と江戸から上方に向かう飛脚に、手紙を託していました。

このように、現在のようなテレビや電話はありませんが、江戸時代には飛脚によって、街道沿いに素早く情報が伝達されていた模様です。

この地震の様子を記した史料は少なく、偶然通りかかった祐之の旅日記は、被災時の藤沢の状況を知るための貴重な史料にもなっています。

( 加藤 )

参考文献:『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』

## 解答と解説

写真 1

「検地帳」、「検地水帳」、「御縄打水帳」、「水帳」などのいくつかの呼称があります。

検地を初めて全国的に実施し、統一政権を樹立したのは豊臣秀吉ですが、検地という土地の丈量事業は、徳川政権になってからも大規模なものが何回か実施されました。

写真1～3は市内に残る検地帳の一部ですが、鎌倉郡川名村に実施された延宝6年(1678)の検地帳(写)です。検地帳には土地1筆(一区画)毎に縦横の長さが測られ、その数値が記録されます。写真1の1行目には、10間(1間=約182cm)と3間半の長さの土地について、等級が下畠、面積は1畝5歩と記録されています。この面積の計算(10間×3.5間=35歩)は30歩=1畝ですから、1畝5歩となります。

以下同様に2行書きに記された縦横の間数を乗ずると面積が算出されその面積は「下畠 畝 歩」と記された数値と一致します。下畠というのは畠の等級を示しており、この検地帳では田畠ともに上、中、下、と3段階の等級が設定されています。なお1筆毎に記された名前を「名請人」といい、その土地の占有者もしくは耕作者を指します。3筆めの「新林」は地名で検地帳上では「地字」といいます。以下八郎兵衛までの地字は新林です。検地帳に記された地字は現在では開発や区画整理などで当時の景観が変貌して、忘れられたものが少なくありませんが、その一部は小字名や通称地名として伝わっています。ちなみに「新林」は現在学校名及び公園名として使用されています。

検地帳は田畠屋敷の各等級順に記されます、写真2の冒頭は屋敷の記載の最後の部分です。「右之寄」とあるのは、それまでの数値の合計を意味する語句で、田・畠・屋敷の等級毎の面積、分米(ぶんまい)・米の収穫量に換算した数値、上田面積に上田の斗代を乗ずると分米の数値となる)斗代(とだい・1反歩当りの米の収量)が記されています。川名村の反当収量の基準は上田1石3斗(約195kg)中田1石1斗、下田8斗、上畠9斗、中畠7斗、下畠4斗と規



写真1 解読例

新林	拾間	三間半	三間半	拾間	三間半	下畠							
拾四間	八間	八間	八間	五間	八間	七間	拾間	八間	七間	下畠	下畠	下畠	下畠
拾七間	八間半	八間半	八間	五間半	八間半	七間半	拾一間	八間半	七間半	下畠	下畠	下畠	下畠
八間半	八間半	八間	八間	五間半	八間半	七間半	拾三間	八間半	七間半	下畠	下畠	下畠	下畠
下畠													
四畝廿步													
八郎兵衛													

写真 2



定されています。また、屋敷も同様に検地され石高に編入され年貢や諸役の対象となっていました。以上の分米 = 石高を合計すると村高となり川名村の石高は274石2斗9合（面積は36町2反25歩）と記されています。最後の部分の読み方は「（略）御検地仰せ付けられ候に依って六尺間竿を以て壱反三百歩也、町・反・畝・歩、員数、斗代高下分量委細書き記し帳面相極め置もの也」ですが、検地の基準（間竿の長さは1間 = 6尺、面積は1反歩 = 300歩 = 10畝・一畝 = 30歩）が示され、検地の年月と検地役人である代官成瀬五左衛門手代平田七郎兵衛が記されています。また原文書の次の頁には平田以下の代官手代、寺社とその土地及び川名村の立会人（名主・年寄）が記されています。（石井）

写真3 解読例

延宝六年 午八月 成瀬五左衛門手代 平田七郎兵衛	細書記帳面相極置者也	町反畝員數斗代高下分量委 右者相州鎌倉郡川名村御検地 依被仰付候六尺間竿を以壱反三百歩也	高合式百七拾四石式斗合 畠屋敷合式拾四町九反七畝四拾五歩 分米合百五拾六石七斗壱升九合 烟屋敷合式拾六町式反式拾五歩 分米八石九斗六升 屋敷八反九畝拾八歩 但壱石代	分米四拾七石四斗式升壱合 但四斗代
-----------------------------------	------------	--	--	----------------------

### コラム 検地帳の地名（川名村）

古文書の読み方でも触れましたが、検地帳に江戸時代の村の地名（地字）が多く記されており、それらの多くは少なくとも戦国時代頃までには成立した地名であり、当時の村落景観や土地利用のあり方等を探るうえで重要な資料です。以下川名村検地帳に記された地名を記載順に列挙してみます。

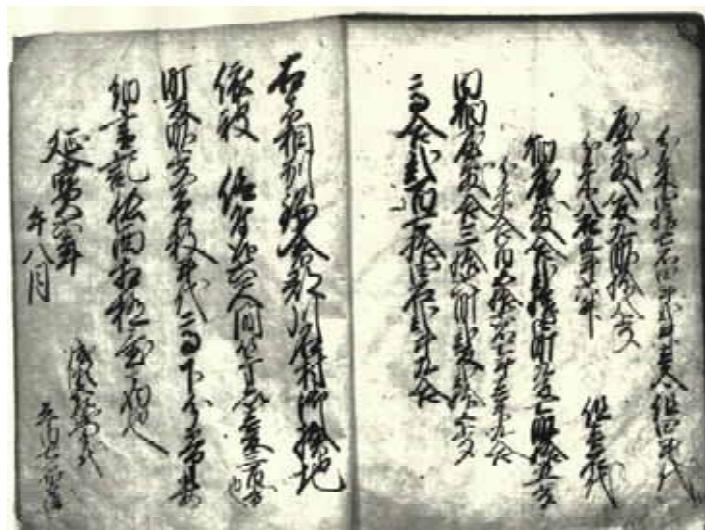
「通町」「中丸」「神光寺谷」「池ノ谷」「前田」「やくら下」「清水」「かまふ入」「竹之内」「森久」「新林」「おく田」（奥田）「嶺久保」「岸」「五反畠」「殿屋敷内」「屋敷内」「屋敷そへ」「山崎」「寺のわき」「松葉」「ほうてん塚」（梵天塚）「もぐり畠」「原」「平内屋敷」「原久保」「蔵屋敷」「市場」「橋場」「ひろせ」「かまいらす」。

これらの地名の内「通町」（とおりちょう）、「中丸」（なかまる）、「清水」（しみず）、「森久」（もりきゅう）、「おく田」 = 奥田、「原」（はら）、「市ば」 = 市場、は明治の地租改正により小字名となり、その属する区域の代表地名として使用されるようになり現在でも使用されています。

写真2 解読例

右之寄	八間 六間 屋敷壱畝拾八歩 清二郎
上田三町壱反六畝八歩	分米四拾壱石壱斗壱升四合 但壱石三斗代
中田三町九反三畝廿壱歩	分米四拾三石三斗七合 但壱石壱斗代
下田四町壱反三畝拾壱歩	但壱石壱斗代
分米三拾三石 田合拾壱町式反三畝拾步 分米合百壱拾七石四斗九升 上畠七町三反八畝拾九步 分米六拾六石四斗七升七合 中畠四町八反三畝廿式步 分米三拾三石八斗六升壱合 下畠拾壱町八反五畝拾六步	但八斗代 但九斗代 但七斗代

写真3



ます。それ以外の地名は公的には使用されなくなりました。

しかし、検地帳の地名の多くはその後も農業等生産・生活に密着した俗称地名として使用され続けました。近年地域景観の変貌や生業の変化などにより地域の人々の記憶も薄れ、検地帳の地名を現地比定することは次第に困難になってきており、川名村も含め検地帳地名の資料としての価値を高めるためにも確認調査は急がれる必要があります。地名の重要性が認識され、地名研究も市民レベルで盛んとなった今日ですが、検地帳地名のようなミクロな地名研究は、地名が消滅すればするほどその重要性が高まる事になるでしょう。（石井）

### 編集後記

1頁で紹介した「帝国在郷軍人会甲府支部報」は、当時発行されたもののうち、ほんの一部しか確認されておりません。お持ちの方や所在をご存じの方は文書館までご一報いただければ幸いです。

また文書館では、昭和時代を中心とした市史を編さん中です。藤沢地域の資料（古文書、写真、地図など）をお持ちの方はご提供ください。（石井）